

## 「キノコの乾燥標本」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

菌類の子実体(胞子の形成と飛散を担う器官)は、秋に発生種類が多い。しかし先日、子どもたちが発見した「アミガサタケ」は、春のキノコである。普通のキノコとちがって、子実体全体に分布する「子囊」という小器官で胞子を造るので、「子囊菌(門)」に分類されている。多くのカビ(アオカビなど)も子囊菌に分類される。

子囊菌は、菌体が脆弱なものが多く、標本として保存するのが難しい。質感も強靱さも「蠟細工」のように感じる。子囊菌に限らず、キノコ(子実体)を標本にする方法は主に2つある。

- (1) 乾燥標本; 子実体から単純に乾燥させ、水分を抜くことで腐敗を防ぐ。自然乾燥と温風乾燥がある。胞子の観察やアミロイド反応などの実験に適する。しかし、水分が抜けることで、子実体の形状が崩れてしまう。また、保管が悪いとカビが発生したり、虫に食われたりする。
- (2) 液浸標本; エタノールや希釈ホルマリンに浸けて、腐敗を防ぐ。形状は維持されるが、色が落ちることが多く、胞子の観察にも適さない。

いずれも利点・欠点があるが、もう一つ、すばらしい方法がある。それが「フリーズドライ」である。先日、その方法で作った「アミガサタケ」の標本を、3年生の男の子が学校に持ってきてくれた。



このアミガサタケは、2週間ほど前に、子どもたちが学校の校庭で見つけて、持ち帰ったものの1本だった。「フリーズドライ」というのは「真空凍結乾燥」のことで、カップ麺の具の野菜などで見かける技術である。本格的にするには大変な費用と設備が必要だが、実は家庭用の冷蔵庫(冷凍室)でも可能である。

家庭用冷蔵庫の冷凍室も、気圧・湿度とも低い。蓋付容器に入れたり、ラップをかけたりせず、長時間(10日以上)冷凍室に入れておくと、水分が完全に抜ける。そのことを、私はあらかじめ子どもたちに教えておいた。この方法の優れた点は、色も形状もほとんど変化しないまま、キノコの乾燥標本を作ることができる。



手のひらに載せると非常に軽く、まるで発泡スチロールのようである。しかし色も形も、生の状態に非常に近い。これは、面白い標本作成術だと思う。